

# グリーンメルスハウゼン受容史の一面

——『ジンプリチシムス』ジュピター・エピソードを中心に——

松井隆幸

## ◆はじめに

ドイツ30年戦争の戦後文学ともいうべき『ジンプリチシムス』に一貫するものと言え、何よりも作者自身の実体験が反映しているだろう、強烈な反戦的・厭戦的気分である。が、抱かれた期待がどうしても満たされないとき、人は観念の世界で過剰な代償を求めるものだ。それがこの作品のそこそこに描き出されるユートピアの世界像であるが、過剰な防衛意識がしばしば過剰な加害に行き着くように、その過剰な代償要求は、後代、過剰に暴力的な読み込みをこの作品に許す結果となった。小論では、とりわけジュピター・エピソードを手掛かりとしつつ、後代、ジンプリチシムスの評価をめぐる、いかにナショナリスティックな意味で乱暴な読み込みがなされたかを具体的にたどるとともに、ついにはグリーンメルスハウゼンがナチスの時代にいたってフェルキッシュ（種族的）な詩人として認証されるにいたるまでを跡付けてみようと思う。以下、ジュピター・エピソードを具体的に詳しく見ていき、その後、これをめぐる評価をたどりたい。

## ◆ジュピター・エピソード

獵人時代のジンプリチウスがひょんなことから生け捕りにした男は自分自身を神ジュピターと思い込んでいる狂人（「学問を詰め込み過ぎ、ことに文学に凝って頭が変になった途方もない気違い」）だった（III, 3-6）。その狂人ジュピターが、壮大な社会改良プロジェクトをぶちあげる。表立ってユートピアのプランを打ち出すことの少ないこの作品中、ムンメル湖の旅や再洗礼派のエピソードとならんで、そのユートピア小説としての性格をもっとも明確かつ率直に打ち出している部分であり、作者グリーンメルスハウゼンの、戦争に明け暮れる同時代への批

判が背景にどのような具体的なプランをかかえもっていたか、もっとも率直に打ち明けられている部分である。

人間の墮落を罰するために地上にやってきたジュピターは、ドイツの英雄をよみがえらせ、その英雄の鋭い太刀風によって仕事を成就するつもりでいる（「悪人を一人残さず滅ぼし、真面目な人間を地上に残して高めてやる」）。これに対してジンプリチウスは反問する。「では、その英雄は兵隊を使うんですね。兵隊を使うとなると、戦争ということになるだろうし、戦争ということになると、罪のない人間も悪い人間と同じように逆りを受けるでしょうね」（これは、いかにもジンプリチウスらしい反問の仕方。作者の戦争観とその相对感覚がよく出ている箇所である。）彼のよみがえらせる万能の英雄は、兵隊など必要とせず、しかも全世界を改革することができる、不思議きわまる太刀の力によって。「わしがその英雄が誕生する際に、ヘラクレスにまさる均整のとれた強い肉体を与え、その肉体に思慮と叡知と分別を十二分に宿らせてやるつもりじゃ。ヴィーナスはその英雄にナルチスもアドーニスもわしのガニミードも顔色なしという美しい容姿を贈るだろう。そして、ヴィーナスは誕生した英雄の持つ豊かな美点へ万人にまさる愛らしさ、美しさ、上品さを付け加え、全世界の人々から好かれる英雄にするだろう。……知恵の女神パラスは英雄をパーナサス山で育て、ヴァルカン神は軍神マースの星である火星が天頂に輝いている時を選んで英雄のために武器を鍛えるだろう。わけてもその時に鍛えられる一振りの剣によって、英雄は全世界を征服し、罰当たりどもを一人のこらず薙ぎ倒すだろう。英雄はその仕事をするために兵隊などの手助けを少しも必要としないだろう。……どんな大きな町も、英雄の姿を見ると震えおののき、不落を誇る要塞も十五分間のうちに英雄の前に膝を屈し、臣下の誓いをするだろう。ついに英雄は地上のすべての大君主に号令するようになり、海と陸を聡明に統治し、神々も人間も太平の世を謳歌するだろう。」「英雄はひとたび起って町や要塞に迫ると、チムールの例にならって白旗を掲げ、英雄が世界に平和をもたらし万人の幸福を促進するために送られたことを知らせるだろう。町の人々、要塞の人々が門から走り出て英雄を迎えればよし、迎えなかったら英雄は鞘をはらい、その剣の太刀風によって町の魔法使いどもの

くびを一つのこらず斬り落とし、次に赤旗を掲げるだろう。それでもまだ誰も姿を現さなかったら、英雄は人殺し、暴利を貪る人間、泥棒、無頼漢、姦淫する人間、色を鬻ぎ色を漁る人間の首を太刀風によって一つのこらず打ち落とし、次に黒旗を掲げるだろう。それでもまだ町に残っている人々が門を開いて走り出て英雄を迎えようとしなかったら、英雄は町全体と町民を頑なな強情者として滅ぼそうとするだろうが、実際は町民をおどして降伏させまいとしていた人間だけを滅ぼすだろう。」

英雄は民衆のありとあらゆる負担を廃するとされるのだが、それを議会を通じておこなうと言う。「こうして英雄は町から町へ移り歩き、どの町にもまわりの土地を分けてやって平和に支配させ、ドイツ全土の町々から町民のなかの最も聡明な学識の高い人間を二人ずつ選び出させ、その人々を議員とする議会をつくり、町と町とを永遠に結び付け、奴隷の身分とあらゆる関税、消費税、利子、地代、酒税をドイツ全土から駆逐し、賦役、見張り番、軍税、寄進、傭兵、その他さまざまな人民の負担を廃止し、誰も極楽島に住むよりも遥かに幸福な生活を送れるようにするだろう。そういう世になったらわしはたびたび神々の全員を従えてドイツ国に降りてきて、ドイツ人の葡萄酒や無花果の下で遊び戯れるつもりじゃ。」注目すべきはこの英雄はきわだってドイツ最良であるという事実である。「更にわしはヘリコン山をドイツ国の真ん中に移し、そこへミューズの神を住ませるだろう。三人姉妹の優美の女神はドイツ人たちの心に百千の歓喜と歓楽を目覚めさせるだろう。わしは豊かなアラビア、メソポタミア、ダマスカスのまわりの土地にもましてドイツにありあまる富を与えるだろう。わしはギリシア語を喋るのをやめてドイツ語だけを喋るだろう。要するにじゃ、わしは完全にドイツ最良になって、昔ローマ人を引き立てたように、こんどはドイツ人を全世界に君臨させてやろう。」つまり、このユートピアはあくまでドイツを中心とするもので、ドイツ人のドイツ人によるドイツ人のためのユートピアであるかのようである。

反目し合う権力者は除かれ、階級の差別はなくなる。そのため地上には永遠の平和がおとずれるとされる。「英雄はあらゆる権力者を三つの組に分け、人民に悪い手本を示し放縦な生活を送っている権力者を身分の卑しい悪人と同じように罰するだろう。地上のいかなる権力も英雄の剣には歯向かえないのじゃ。他の権

力者たちは国にとどまるか国を去るかを選ばされるのじゃ。国にとどまって国を愛そうとする者は、一般の人々と同じ生活に甘んじなくてはならないだろう。しかし、そのころドイツ人の個人生活は現在の王侯の生活や身分よりも遥かに幸福で楽しいものだろうからね。……これが第二の組じゃ。第三の組の王侯は、権力の味を忘れられなくて、依然として権力をふるいたがる王侯だが、英雄はその王侯たちをハンガリアとイタリアからモルダビア、ウォレイキアへ、マケドニア、トラキア、ギリシアへ、そしてリスボン海峡を越えてアジアへ連れて行き、それらの国々を手中におさめさせ、ドイツ全土を戦争気遣いどもを一緒につけてやり、その国々の王侯にしてやるだろう。ついで英雄はコンスタンチノーブルを一日で攻略し、改宗しなかったり膝を屈しなかったりするトルコ人の首を一つのこらず尻の下へ転げ落とさせ、そこへ神聖ローマ帝国を再建し、自分はドイツへ舞い戻り、議員たちと（前にも話したように議員はドイツ全土の町々から二人ずつ選ばれ、ドイツ国の監督者とも父親ともいえる役に任ぜられるのじゃ。）ドイツの真ん中に一つの町を建設するが、その町はアメリカのマノアの町よりも遥かに大きく、ソロモンの頃のエルサレムよりも黄金があふれ、町の外壁はチロルの山々と高さを競い、町の濠はスペインとアフリカの間の海と広さを競うだろう。英雄はその町にダイヤモンドとルビーとエメラルドとサファイアのみから神殿をつくるだろう。美術館もつくられ、そこにはシナの王、ペルシアの王、インドのモガル大帝、タタールの大帝、アフリカの司祭ヨハネス、モスコーの大ツァールから贈られたすばらしい献上品のうちから全世界のあらゆる宝が集められるのじゃ。英雄がトルコ皇帝から国を取り上げずに、それを神聖ローマ帝国皇帝に采邑として与えておくだけにしたら、トルコ皇帝はいっそうまめめしく臣下の礼をつくすだろう。」「イギリスとスウェーデンとデンマークの君主は、これはドイツ人と血筋も同じであるし、スペインとフランスとポルトガルの君主は、昔ドイツがこれらの国を占領して統治したことがあるから、これらの君主は王冠と王国と併合した領土とをドイツ国民から好意的に采地として与えられるだろう。これで全世界のすべての民族の間には、アウグストス皇帝の頃のように永久の平和が訪れるだろうよ。」

最後に宗教上の和解。「違ったさまざまな宗教があるのに、どうしてドイツに

永久の平和がつづくんでしょね。それぞれの宗教の坊主たちは信者を扇動して、自分たちの宗派の勢力を大きくするために次々と戦争を起こしはしないだろうか。」というジンプリチウスの心配に対して、この世紀、深刻な宗教戦争を招来した宗派上の対立は調停され、完全な宗教統一が達成されるとされる。「わしらの英雄はその危険を抜け目なく防ぎ、手初めの仕事として全世界の全宗教を統一するだろう。……英雄は全世界の完全な平和を確立してから、こんどはキリスト教を信奉するあらゆる民族と諸宗派の長と頭をつとめる聖職者と世俗人を召集し、その人々に感動的なすばらしい説教をし、信仰の問題で今日までつづいていた分裂の恐ろしい害毒を懇々と説き、代表者たちは英雄の明快な論拠と聡明な理論に打たれて、自分から進んで全宗派ノ統一を希望し、その仕事のすべてを英雄のすぐれた理性の指導にゆだねずにはいられなくなるのじゃ。そこで英雄はあらゆる国々、あらゆる隅々から、あらゆる宗派にわたって最も聡明で学識豊かな敬虔な神学者を召集し、昔プトレマイオス・フィラデルフスが七十二人のバイブル翻訳者のために心配してやったように、重大な問題を邪魔されずに瞑想できる明るい静かな土地を選んで会議場を用意してやり、神学者たちはそこで食べ物飲み物、その他必要なものを与えられ、諸宗派の融合統一を妨げている論点をできるだけ短時日ノウチニ、しかもできるだけ熟考熟慮を重ねて解決してから、次に完全な一致協力によって聖書と古代からの伝承と権威ある教父たちの意見を基礎にして正しい真実の神聖なキリスト教を起草する仕事を完成するのじゃ。……神学者の会議がつづく間、英雄は全世界のキリスト教国に命じて鐘という鐘を鳴らさせ、最高の神に祈りを捧げるように命じ、真理の守護神を送らせ給えと祈りつづけさせるだろう。そして、神学者のなかにブルートーの甘言に騙される者があつたら、英雄は宗教会議の全員を、教皇選挙の部屋のおけるように飢餓で苦しめるだろう。神学者たちが宗教統一の貴い仕事を完成することに熱意を示さなかつたら、英雄は神学者たちの全員をしばり首にすると行って威嚇したり、例のすばらしい剣を示したりして、最初はおだやかに、最後には峻厳な顔をして震え上がらせ、縮み上がらせ、それによって仕事に取り掛からせ、今までの頑迷な誤った考えで世界を今までのように欺きつづけることを断念させるだろう。統一が実現したら、英雄は盛大な祝賀会を催し、醇化された宗教を全世界に布告するだろう。その宗教

に矛盾する信仰を抱く者は、硫黄と瀝青で苦しめられるか、そういう異端者は黄柳の枝を添えてプルトーにお年玉として献上されるだろう。」

### ◆Tieck によるジュピター・エピソードの受容

18世紀を通じて無難な娯楽読み物として親しまれていた『ジンプリチシムス』を政治的にアクチュアルな作品として顕彰してみせたのは、何よりも、初期ロマン派の詩人 Ludwig Tieck の功績であった。彼は従来あまり注目されていず、余計なものとか見えなされがちだったジュピター・エピソードにフランス革命、ナポレオン戦争など彼の同時代の諸事件を読み込むことで、同時代人の関心をこの作品へとにわかには引き寄せてみせたのである。すなわち1798年、Tieck は短編 „Ein Tagebuch“ を発表する。そのなかでジュピターの発言の要旨をそのまま再現すると同時に、その議論を当時カントによって発表されたばかりで初期ロマン派の詩人たちによっても強い関心をもたれ大いに議論を呼んでいた論考『永遠の平和のために』（1795）とを結び付けてみせたのである。Tieck はそこで、グリーンメルスハウゼンの当時の30年戦争による国土の荒廃にナポレオン戦争の混乱を重ね合わせることで、小国分立のために苦悩するドイツについてはヨーロッパに永遠の平和を打ち立てるために要請される英雄への待望を、グリーンメルスハウゼンの作中に登場するドイツの英雄に重ね合わせてみたのだった。これによってロマン派によってもたれがちだったジンプリチシムスを古ドイツのなものと同一視し、そこに回顧趣味的に感情移入してみせるという従来の読み方は徹底的に乗り越えられたと言える。ジンプリチシムスは同時代の生き生きとした政治的関心に引き付けて読まれることのできる作品として復権したわけである。

この Tieck の功績は、実は、1809年に公刊された、ジュピター・エピソードだけを独立させて詳細な注釈を付けて出版された版に刺激されたものだった。その版は表題を『19世紀の英雄、17世紀の黙示録、あるいは近代の実現されたる予言』という。ここで19世紀の英雄と言われているのは、誰であろうナポレオンである。ただしこの注釈の調子とは言えば、ナポレオンをドイツ人の立場から称揚しようとするものでは決してなく、風刺を込めてドイツ諸国の無力を悲嘆し解放を願望するという主題のダシにナポレオンを用立てているに過ぎないものだった。

## ◆19世紀におけるグリンメルスハウゼン評価

19世紀前半はゲルマニストの間に愛国主義が燃え盛った時期であるが、これを単純に、帝国創建の時期を覆ったナショナリズムと同一視することはできない。ゲルマン的伝統の回顧的重視は、何よりもナポレオンの支配とそれにつづくウィーン体制におけるフランス的なもの、ヨーロッパに普遍的なものに対して特殊ドイツ的なものを保護しようという防衛的な意識によって胚胎されたものだったからである。1848年の革命の蹉跌によってようやく、ゲルマニストの愛国心はプロイセン・ドイツを志向するナショナリズムに方向をとりはじめるのである。その究極目標は、言うまでもなく帝国の創建であった。同じような変化の過程は17世紀の文学作品をめぐる評価にも見て取ることができる。ナポレオン支配と小国分立のドイツの現実に直面して、それを30年戦争によってもたらされたドイツの遅れた現実に結び付けて考えようという志向が次第に高まってゆく。グリンメルスハウゼンの評価も例外ではなかった。そこで次第にグリンメルスハウゼンは国民詩人としての相貌をあらわにしてゆくことになった。

## ◆20世紀前半における評価

19世紀を通じたゲルマニスティークの発展の中で、グリンメルスハウゼンと彼の「ドイツの国民的ロマン」は、とりわけ帝国の創建以後、ドイツの国民的伝統に堅く結び付けられて観念されるようになっていた。ジンプリチシムスは打ち捨てられたドイツ国民の具象化であり、グリンメルスハウゼンはよりよき時代の告知者であるという見方が長い伝統として根を張り、様々にヴァリエーションを施されて次々と主張された。このような解釈にとりわけ根拠を提供したのは、30年戦争時代のドイツの悲惨という歴史的背景とともに、ジュピター・エピソードにあった黙示録的予言であったことは言うまでもない。20世紀に至ると、30年戦争の悲惨と一次大戦後の苦境とが単純に重ね合わされたことも手伝い、このような思い入れをともなった解釈はとりわけ力を得て、このことがひいてはグリンメルスハウゼンをナチスご推奨の作家へと仕立て上げてゆくことにもなったのである。

ワイマール共和国における若手保守派の理論的指導者であったArthur Moeller van den Bruck (1876-1925) は、1904から10年にかけて大著『ドイツ人、われ

われ人間の歴史』を出版する。そのなかには Hans Sachs とならんでグリーンメルスハウゼンにも1章がさかれている。グリーンメルスハウゼンは、過度に外国の影響下にあった時代のうちにあって、ひとりドイツ的なものを保持し、次代へ橋渡しする役割を果たした人として称揚されている。ジンプリチシムスは、Moeller によれば、ドイツ的なものがこのうえなく脅かされた時代うちにあって Nation の運命の具体化であって、その未来の可能性を暗示する人物像であるとされる。グリーンメルスハウゼンは、自然に親しく、粗野ではあっても素朴にして豪快、あらゆる民衆的なものを代表しており、異国文化礼讃の同時代の浅薄な風潮とは鋭く対立する作家である。彼によれば、30年戦争はドイツ文化の発展を決して中断することにはならなかった。むしろドイツ文化を当時の風潮にあった脱国民化、ロマンス化というべきものから守り保持する役割を果たした。彼にとってバロック的なものとカトリシズムとは、中世を再生して国民文化を脱力化するガンというべき傾向であって、ドイツ文化を担う主力はぜひともゲルマン的、プロテスタント的なものでなくてはならず、その傾向を代表している者こそがグリーンメルスハウゼンであり、その代表長編ジンプリチシムスの単純にして粗削りな性格であるとされる。こうした見方の基礎にあるのは、文化総体と「西洋」に対するやみがたい敵意と、プロテスタント的・プロイセン的なものとして帝国の創建を基礎づけようとする強い意欲であった。

ロマン派がジンプリチシムスを政治的にアクチュアルな作品として問題化して以来、この長編をそのつどの時代の出来事と結び付けようとする試みはやむことがなかった。

1914年と1945年の間の時期も例外ではなく、そこで語られた言説は、浅薄な政治的プロパガンダ、愛国的な演説、国家的・反啓蒙的な学問的言説から、はてはナチスによる首尾一貫したグリーンメルスハウゼンの受容にまで至っている。

例えば一次大戦に際しては、「ドイツの英雄」をドイツ帝国主義の表現として称揚し、あるいは弾劾するということがおこなわれたし、1924年のグリーンメルスハウゼン生誕300年の式典（当時想定されていた生年による）では愛国的な調子の熱っぽい祝辞が相次ぐという具合であった。多くの論者にとっては当然のよう



に一次大戦と大戦後の悲惨な国民的体験がグリンメルスハウゼンへの通路を開く結果となっていた。彼らはこぞって30年戦争時の国民的悲惨と今時のドイツの悲惨とを重ね合わせて、歴史的な差異を無視し、グリンメルスハウゼンの黙示録的著作の意義を説いたのだった。

例えば Johannes Alt は1935年のグリンメルスハウゼンのついて著した論考において、民族感情の核心を不確かなものとしてしまう危険に抗してジンプリチムスはドイツ民族の根源的な健康さをあらししているとされる。それは歴史におけるあらゆる障害を排して生き続ける破壊され得ないドイツ民族の健康さを象徴しており、その政治的含意を今こそわれわれは認識できるとされるのである。

また Julius Petersen によれば、グリンメルスハウゼンはスペインのピカロをドイツ化し、それにプロテスタント的な出自と高貴な血脈を与えることで、根無し草に過ぎなかった同時代の諸々の詩人たちを凌駕していると説き、ナチス時代に繰り返されることになるグリンメルスハウゼンにおけるドイツ的なものの称揚という論法に範型を与えることになった。

1933年、Heinz Kindermann は、新たな国民の団結のためには新しい健全な国民文学が要請されると主張した。ナチ政権下のこの時期、こうしたものの見方がこの時期のグリンメルスハウゼン研究に大いに影響を与えたのは言うまでもない。そこでは民族＝国民のためになるかならないかが、一切の事象の評価軸となるのである。39年に書かれたとある博士論文『グリンメルスハウゼンのロマン派による再発見とそのドイツ的意義』の史観は、先に見た Moeller van den Bruck 様の歴史観によって強く刻印されている。ロマン派の功績は、ひとえに、彼らがグリンメルスハウゼンを啓蒙主義的な価値観から引き離し、ドイツ的な精神の自己規定と民族の生成にそれを引き入れたところにあるとされる。これはまさしく民族イデオロギーのグリンメルスハウゼンへの適用という点でこの時代一世を風靡する観点の範型をなすものだった。

Hermann Eris Busse (1891-1947) はナチの民族イデオロギーの宣伝をこととしつつ郷土史家と作家を兼ねて活動したフライブルクの人であり、グリンメルスハウゼンの伝記をものしてもいるが、オフエンブルクにおけるグリンメルス

ハウゼン同人会の設立（1939、この会には後にナチ党の幹部も名を連ねることになる）にあたって、晩年の格林メルスハウゼンが対フランス戦争に際して村長として和平のために尽力したという故事を引き合いに出し、「ドイツ的なものの詩人」、民衆の代表者としての真の指導者として（Führerという言葉が用いられている）彼の愛国精神を称揚して詩人の人格を神話化し、彼はドイツの小国分立を心底憎んでいたと結んで、国民の団結という要旨に結び付けてみせたのだった。

### ◆まとめ

要するに、ジンプリチシムスは、異国の文化-土着の精神、合理-非合理、都市-田舎、洗練-素朴、貴顕-民衆といった対立軸においてはつねに後者を占め、しかも、その後者に対してはつねにヨーロッパに対する遅れとして観念された特殊ドイツ的なものが同時に割り当てられてきたために、きわだってドイツ的にして民衆的なものの代表として認知されてきたと言えるだろう。そして前者の抑圧に対する後者の反発が野卑な反逆を示すときに、その旗頭としてかつがれてきた気味合いがあるのであり、ナチスの時代、その作者格林メルスハウゼンがまさにフェルキッシュな詩人の代表格のような押し立てられるのも、そうした発想が傾きがちな当然の末路であったと言えるだろう。

ジュピター・エピソードは、それ自体、反戦的で平和的な志向に貫かれ、宗教統一など同時代のライプニッツにつらなるような建設的な精神を孕みながらも、暴力に対しては暴力をもってするとする素朴な視点と、そのあまりにドイツ中心的な発想のゆえに、「遅れたドイツ」がその遅れを怨念にいろどられた屈折した自尊心として反転して示そうとするときには、最初に述べた過剰防衛の過剰な加害への反転という機微も手伝って格好のより所を与えたと言える。総じてジュピター・エピソードに関わる解釈の脈絡は、ユートピア的発想に伴いがちな負の側面を露骨に示すことになったと言えそうである。

## テキスト

Grimmelshausen *Simplicissimus Teutsch*, Bibliothek Deutscher Klassiker  
Frankfurt am Main 1989

なお引用箇所訳は岩波文庫の望月市恵訳をほぼそのまま用いた。

## 参考文献

Volker Meid, *Grimmelshausen Epoche-Werk-Wirkung* Munchen 1984  
Gunther Weydt, *Hans Jakob Christoffel von Grimmelshausen* Tübingen  
1979  
Dieter Breuer, *Grimmelshausen Handbuch* Munchen 1999

(まつい たかゆき 独文)